会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和3年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」（２）教職員の資質能力向上の推進①効果的な教育成果②教職員研修プログラムの構築 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第2回ICT活用研修WG |
| 開催日時 | 令和3年9月6日（月）　12時00分～14時00分 |
| 場所 | オンライン開催 |
| 出席者 | 事業責任者：高岡　信吾 委　　　員：猪俣　昇、岡村　慎一、菊池　裕生、岩﨑　千鶴、合田　美子　長瀬　あゆみ、中田　明子　　　　　　　　　　　計8名請負業者：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　　　　　計1名　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計9名 |
| 議題等 | 1. ICT活用研修の具体的な組み立てについて（猪俣）

・前回のWGでヒアリング対象校4校が絞られた。ヒアリングを踏まえた上で研修をどう組み立てるかを進めていきたい。特に研修については、アダプティブラーニングの定義、到達目標についてご意見をいただき組み立てていきたい。また研修の事前学習・当日・事後学習について、研修に対する評価についてもご意見を伺いたい。(1) アダプティブラーニングの定義について・昨年度の調査結果で得られた知見から、アダプティブラーニングに必要な要素を8つ挙げている。学生へのアプローチ、ICTを活用した具体的な授業方法が話の中心になるが、その他の項目についても多少触れる内容としている。(2) 研修到達目標、評価、研修方法（深堀調査含む）について・事業計画書内「授業デザインにデジタルコンテンツを導入し、ICTツールを活用して学習支援を行うことができる者を育成する」を具体化・焦点化すると、1つ目に、学習に対する意欲が低い学生、自立学習が苦手な学生に対応するためのコミュニケーション理論の理解とコミュニケーションスキルの習得。2つ目に1つ目を踏まえ、ICTを利用して効果的なコミュニケーションを実施できることを研修到達目標とし、皆さんの合意を得たい。・研修目標到達の評価については、現在は詳細未定だが、アセスメント設計した上での先生の自己評価、学生のフィードバックを評価方法として考えている。・研修方法は、大きく事前課題、当日の研修、事後課題に分けている。事前課題は、2つ考えており、1つ目は基本的なICTツール、Google Workspace、 Slack、 Zoomの設定方法、使い方の理解、2つ目はコミュニケーションに関する課題図書のレポートとし、基礎知識を理解して研修に臨んでいただく。研修当日は、導入編、ICTツール編、コミュニケーション編に分けている。導入編では、現状の事例を講義形式で紹介し、アダプティブラーニングに資する活動として、勇気づけ・日々の学生記録が重要だというマインドセットの解説をしたい。ICTツール編も講義形式。学生と先生1対1や、大勢、学生同士や先生の中でのコミュニケーションツールなど利用シーン別に選択方法や使い方をまとめた動画教材を作成し、デジタルハリウッドの石川先生の事例を中心に紹介・解説をする。コミュニケーション編では、導入編・ICTツール編を踏まえた上で、学生の記録をベースに、記録を見た上での学生へのアプローチ方法やコミュニケーション内容を各学校の実際の素材を題材として検討するワークショップを考えている。ラーニングポイントとして13項目を挙げている。素材収集などの関係で全てを研修で触れるかは未定。ここでは講義プラスワークで「勇気づけ」のコミュニケーションに焦点を当てる。・深堀調査の対象校は中央医療健康大学校、山野美容芸術短期大学、クラーク高校、デジタルハリウッド大学院の4校。素材収集のために2段階のアンケートを考えている。1段階目は事前クエスチョンとして「意欲が低い」「目標がもてない」「自分に自信がない」「自立的に動けない」 学生とのコミュニケーション記録をいくつかの条件の元に提供いただく。2段階目はその情報を踏まえて、提供いただいた記録の学生のバックボーンのヒアリングも含め、その学生への対応などについての面談ヒアリングを考えている。各校10名分、合計40名分の素材を収集し、コミュニケーション編のワークショップの題材をピックアップしたいと考えている。・事後課題は、研修を通じて学んだ「学生の記録方法」・「そのアプローチ方法」について実際に現場で実践いただく。5項目の課題を出し、レポート提出、研修講師からレポートへのフィードバックという流れを考えている。【意見等】・問題なし。（長瀬・岩﨑・菊池）・イメージしているものは座学か実技か。どちらもとなると無理を感じる。実技となるとコミュニケーションは大事だが、全てにおいてコミュニケーションを取ることが目標になっているように感じる。実際は到達させることが目標だが、コミュニケーションを取って到達に導く、という内容で良いか。（高岡）→実技で学生個人の目標達成のためにどのようなコミュニケーションを取ったら良いか、経験・勘だけではなく理論的な根拠も踏まえてラーニングポイントを設定した。（猪俣）・「コミュニケーション理論の理解・スキルの習得をICTを活用して効果的なコミュニケーションを実施できる」ということは「ある一定の勇気づけの理論背景を知的技能ベースで理解する」ということが到達目標になっていると思うので、ここは座学でカテゴライズされた知識、状況に応じた対応を共有する、ということが到達目標になるのかなと理解した。スキルなので、技法的なところを実際に実践するのか、事例を通じて自分でメタ認知できるように議論をするのかの習得が、行動に移せる目標としてあると感じたが、そこにどうICTを活用するのかが見えにくい。ICTツールは漠然としているので、ICTコミュニケーション（記録ツール）というのがどんな意味合いを持っているのかなど、もう少し具体的な説明が欲しい。コミュニケーション理論とスキルを、ICTを利用することでどれだけ効率的に良くなるのか、の結び付けがあると良い。（岡村）→記録は日報か週報を予想しており、学生からのアウトプットを学生のルーティンとし、その記録に先生がICTを使って常時返信できる、というような繋がりをイメージしている。（猪俣）→専門学校でそれを実施する時、そのデータをコンテンツの成果ではなく、プロセスとして個人の心理的な動静などを確認するための項目・質問内容が肝心になると考えているが、そこにラーニングポイントがどのように入り込んでくるのかを感じ取ってもらえるようにすることが重要。（岡村）→ICTを使っての勇気づけコミュニケーションの答えが現在無い。これから調査で集める事例や石川先生の実践の中からラーニングポイントに繋がる事例をピックアップし、答え（一つの提案）を作成する予定。（中田）・以前より分かりやすくなった。ICTツールを活用した学習支援でフォーカスがコミュニケーションになっているが、e-ラーニングで学んだ履歴などの他データは全く使わないのか。また、アダプティブラーニングではラーニングアナリティクスなどのデータを上手く使った学習支援の紹介など入れなくていいのか。他、リフレクションのやり方を上手く組み合わせると自己内省を促しつつ欲しいデータが取れると考える。自由記述だけでその事例の当事者の状態を理解するのは難しい。自然言語処理や成績と組み合わせるなど工夫が必要だと感じる。（合田）→日報など学生からのアウトプットのみで状況を把握するのは難しいので、日報以外の部分で学生に関するデータを当日ヒアリングし、他の情報にしようと考えている。（猪俣）→学生の傾向を見て読み取っていく方法では、できる人はできるができない人はできないという、教師の実力に依存する形になるのではないか。（高岡）→実際に学生の状況を連続で記録しフィードバックするとモチベーションも高くなり検定の合格率も上がった。教員歴や前職などを考慮すると研修のレベル設定をしないと難しいと感じる。学生への声掛けなど、勘で対応する部分があるので、そこを理論付けられればと良いと思った。（長瀬）→教師間で認識の差、違いが出てくるので、基準を明確にすることが必要だと感じる。（岩﨑）→コミュニケーション以外の要素を踏まえた上でのパフォーマンスの標準化は理論の研修だけで説明できるのかどうか。（猪俣）→中心はコミュニケーションで良いが、学生の状況把握の仕方はそれぞれケースがある。ICTを使うことで文字の記録だけではなく学生の成果が可視化できるということが分かれば、学生の状態を見ることに必要なことができると思うので、ICTを活用することで負荷をかけずに支援が必要な学生を見分けられ、アダプティブラーニングに必要なものを出すための仕掛けを紹介できると良い。（合田）→授業デザインにデジタルコンテンツを導入し…という大枠の目標があるならば、授業デザインそのものにどのタイミングでどのように効果的に双方向のやり取りをすれば、学習意欲が低いとか自立的にできない学生の意識付けになるか、オンラインでの集中時間などの理論背景に基づいてGoogleフォームやスマートフォンなどのICTツールを活用したアンケートなどを組み込んだシラバス作成の提案のようなものがあると良い。返すだけのコミュニケーションではなく、イエスノーや首を傾げるなどの仕草が定量的に見えるとか可視化されることが大切。そこをなかなか感じ取れない教員のために、シラバスに組み込むと効果的なICTツールのチップスの紹介が出来ると良い。したこと、感じたこと、考えたことでどうするか、リフレクションの4項目などを入れていくというような話なのかなと考える。（岡村）→ICTツール編では、何も教えないで個人の能動的な学習を促す授業の事例、いろいろな専門学校の先生方の好例を組み合わせてメソッドを提示、その中でどのようなICTツールを使っているか紹介し、その上で受講されている先生方の学校で使っているICTツールを使ってどのようなことができるか議論することを考えている。使用アプリ例では、コミュニケーションだけではなく、クラス運営やルーブリック作成、配布資料・アンケート・課題提出などの用途についても紹介する。こういった事例を基にどんなものを使ってどんなことができるか議論ができればこの研修の目的を果たせるかと考えていた。コミュニケーションは学生の学習理解の発展のために必要なので、教師と学生以外にも学生同士のコミュニケーションについても話そうと考えている。（猪俣）→ICTツールの事例紹介、コミュニケーションの理論を伝えた上で先生方が現場でどう活かしていけるのかを考えることがゴールであればイメージができる。（中田）→評価基準はバラバラなので、理想の姿、評価基準をルーブリックでまとめることが望ましい。そこが明確になっていないことが多いので、研修ではそこについても紹介したいと考えている。（猪俣）→石川先生の授業は理想的だが、ICTツールをラーニングポイントにどう繋げていくか。“発見できる形”を作らないと研修を受けてもそれだけで終わってしまう。（高岡）→答えは無いかもしれないが、「こういうやり方をすると良い」という理論はあるので、そこを組み込むような形で研修を組み立てると良いと感じた。またルーブリックの作成は大きな負荷がかかるので、チェックリストでも良いのでは。その評価と日報を組み合わせた例だと使ってみようかという気持ちになるかと考える。（合田）→石川先生の事例の中では効果があったことだけではなく失敗したことも紹介して先生方がどう考えるか。理論や正解を示してもやるかどうかは未知数なので、自分の中でまとめてアクションプランを立てる、自分事にするまでが必要だと考える。（猪俣）→研修で議論するだけではなく、現場でやってみよう、実際にやってみる、まで繋げたい。議論は必要だがある程度の型のようなものは示したい。分析、アプローチは中田先生のコミュニケーション理論で標準化の施策、収集の部分は、日報も含めたデータ、ICTツールの活用の一定の型を紹介、その型をできるようになるところまで持っていきたいがどうか。（猪俣）→授業デザインとICTツールの活用でどうやって学生の様子が分かる証拠が集められるかを紹介、分析でコミュニケーションだけではなく他の要素も必要だが、流れは良い。収集は授業設計と合わせて考えたほうが良いと考える。授業の例を提示しどんなエビデンスが取れるか考えてもらう方法で2～3例実施すると自分でも応用ができるようになるのでは。（合田）→研修に事前事後の学習も入れていることを考えると、学ぶ先生がどのように自分の授業設計をしているか、研修を受け実践することでどう変わったかを見る上でも、現状のコマシラバスがどのように作られているか、そこにどのような2Wayのコミュニケーションがとられているかを確認する作業が結果的に授業デザインの振り返りとして必要だと考える。（岡村）→コミュニケーション全般の話として考えていたので、1つのモデルを作るならば、それぞれのフェーズで効果的なコミュニケーションとラーニングポイントをどう組み合わせていくか検討が必要だと感じた。（中田）→実際に行っているコミュニケーションの確認と、そこに付け加えるとしたらどのタイミングでどんなラーニングポイントに関するコミュニケーションを入れると良いかを示すと先生方も対象の学生像が見えてくると思うので、そこに当てはめて授業計画を作り直して実践すると効果的だと考える。どのような改善が必要なのか見えてくると学びに繋がる。（岡村）→授業設計を実際にやっている人にもやっていない人にも有効だと思うので、収集→分析→コミュニケーション（アプローチ）のパターンは良いと感じる。（高岡）→分析は経験や勘の場合は多いと思うが、どんな型がいいのか。（猪俣）→先生が「ここまでやってほしい」という達成ポイントがあると思うので、それが出来ているか出来ていないかでフォロー対象を見つけてフォローする、チェックリストやアンケートでできていない部分にフィードバックするなど、それぞれの場面に対する方法を示しても良い。（合田）・深堀調査対象校に変更はないが、調査方法・内容については、別のタイミングで今回のWG内容を反映する。（猪俣）【課題まとめ】(1)アダプティブラーニングの定義・デジタルコンテンツ（教材）とICTツール（コミュニケーション）を活用した学習支援（適切なタイミングで適切な声掛け・アドバイスを行う、学習計画立案）を通じて、学生一人ひとりの学習目標が達成できること⇒ここでの、学生一人ひとりの学習目標は「実技」を想定 できない学生をどうフォローするかに、焦点あてる　(2)ICTの絡め方が不明瞭①収集面・日報的なものを学生に記録してもらう上で自由記載にしない設問工夫（ミニッツペーパー、リフレクション）・日報以外の記録収集は考えないのか？（質的・量的、アンケート、成績、出席、心理的、動的など・・・）・収集タイミング（どのタイミングでどういう記録をとっているのか）　⇒　授業デザインに依存してくる②分析面・ラーニングアナリティクス・自然言語処理・収集記録と対に（全体に対する進捗率、差分、など）③コミュニケーション面・リフレクションサイクル（ギブス）・コミュニケーション理論（13個のラーニングポイント）(3)研修・研修参加の職場でノウハウを再現してもらうために、研修内の議論は発散だけではなく収束が必要（結局、何をすればよいのか持ち帰れる具体的ノウハウ）・そのために、各職場でアレンジの余地を残しつつも、研修は一定の型を学ぶ場所としたい。・現在の先生方のやり方を改良できる、付け加えることができるノウハウ。・記録収集の型、分析の型、コミュニケーションの型・現状のコマシラバス確認・授業内外の発問・振り返りの現状↑に付け加えるとしたら、日報？どのデータをどのICTツールを使って集めるか。1. スケジュール（猪俣）

・第3回ICT活用研修WG…10月4日（月）10時～12時＠オンライン開催 |
| 配布資料 | ・FY2021スケジュール\_20210906\_0906 |

以上